JASE
現代性教育研究ジャーナル

2015年
No.47
2015年2月15日（毎月15日）発行

日本性教育協会
THE JAPANESE ASSOCIATION FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL http://www.jase.faje.or.jp 発行人 鈴木 勲 編集人 本橋道昭
© JASE. 2015 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

「関西性教育研修セミナー2014冬」報告 …… 1
第24回関東甲信越静性教育研究大会長野大会 … 6
もっと知りたい女子の性⑥…… 8
性教育の歴史を尋ねる㉓…… 10
今月のブックガイド…… 11
JASEインフォメーション …… 12

◉「関西性教育研修セミナー 2014 冬」報告◉現場からの発信 !!

知的障がい児（者）への性教育実践の工夫あれこれ

2014 年 12 月 23 日（火曜日・祝日）午後 1 時 15 分より、大阪府立大学「I-site なんば」において、現場からの発信 !!「知的障がい児（者）への性教育実践の工夫あれこれ」をテーマに関西性教育研修セミナーが開催された。セミナーでは、大阪府立泉北高等支援学校養護教諭の船木雄太郎氏、淑徳大学大学院／人間総合科学大学非常勤講師の武子愛氏の 2 つの実践報告が行われ、報告後、講師と参加者の間でディスカッションが行われた。

主催：関西性教育研修セミナー実行委員会

はじめに

17 回目をむかえた関西性教育研修セミナーは、知的障がい者への性教育に取り組んでいるお二人に、その実践の様子を報告していただいた。

お一人目は、男性養護教諭の船木雄太郎氏の報告である。

全国で 46 人、大阪府で 5 人の男性養護教諭がいるという。その中の一人である船木氏は、「『せい』からひろがる、新しい自分をみつける～性に関する指導実践～」をテーマに、性に関する集団指導および個別指導の実践をギター演奏と自作の歌をまじえながら報告された。

お二人目の淑徳大学大学院／人間総合科学大学非常勤講師の武子（たけし）愛氏は、「性のモラルを守るための性教育実践～軽度知的障がい者を対象に～」をテーマに、通勤寮における実践を報告していただいた。

『せい』からひろがる、新しい自分をみつける～性に関する指導実践～

船木氏の報告は、「手をたたきましょ。足踏みしましょ。……、ああ、おもしろい」と、いきなり歌から始まった。

「障がいのある生徒の性に関わる行動上の問題解決の支援において、従来型の知識を教授することを重視した性教育や、問題発生時に一時的に注意する指導のみでは、限界があると感じていました。そこで平成 21 年度から、大阪大学大学院の野坂祐子先生の指導助言のもと、問題となる性行動のある生徒への支援を始めました。この指導・支援をきっかけ

に、学校全体でさまざまな実践に取り組んできました。その実践の一部を紹介するとともに、私の感じていることをお話します」と語る船木氏たちの実践の根底には、次のような課題に対する分析がある。

『平成25年度「思春期におけるさまざまな課題のある生徒への健康教育と生徒指導」報告書Ⅱ』(編集・作成：野坂祐子大阪大学大学院人間科学研究科）に掲載された文章（池川典子・船木雄太郎）を抜粋する。

知的障がいのある生徒が通う本校に着任した当初、難しいと感じたのが、「ムカつく」「イライラする」といったネガティブな感情を前面に出しながら、暴言や暴力的な行動などで表現する生徒への対応だった。当時は、そんな生徒たちの怒りをどう鎮めるかが最大の課題であると感じていた。

生徒の怒りの感情について聴き、怒った理由について話をよく聴くように心がけて対応したところ、生徒の感情はやがて落ち着き、次第に保健室に来るだけでクールダウンできる生徒もみられるようになった。話をよく聴くことは、このように有効な対応であり、一定の効果はみられたものの、何度も同じような場面で怒りを爆発させる生徒がいることに気づいた。つまり、その場では、教員の支援があれば怒りの気持ちを鎮めることができても、別の場面で繰り返し同じような怒りのパターンを繰り返しているのである。

本校の保健室に来室する生徒の悩みの多くは、友だちや異性、教員や保護者との人間関係にまつわるものである。それらの悩みは、「しんどい」という倦怠感や頭痛などの身体症状、暴言や暴力、性に関する問題行動といった行動などによって表現されることが少なくない。また、怒りのコントロールができずに、リストカットなどの自傷をする生徒や、怒りの爆発が原因で友だち関係がうまくいかない生徒、そしてその無力感や不全感から「死にたい」と言う生徒もあり、その場で生徒の気持ちを聴くだけの対応には限界を感じるようになった。

人間関係がうまくいかない理由には、自分や他者の感情の理解が不十分であり、感情のコントロールがうまくできない、そしてコミュニケーションスキルが身についていないといったことが考えられる。これらは、こころの発達課題ともいえるものである。（中略）

自作の歌で始まった船木氏の実践報告

実践研究のなかで、生徒の感情だけに注目するのではなく、「思考－感情－行動のつながり」を学んだことが一つの転機になった。生徒の考えかたを理解しようと努めると、生徒の話の聴きかたも変わっていった。生徒が「その場面をどんなふうに捉えたのか」を理解しようとすると、生徒がなぜそんな気持ちになったのかがわかりやすくなる。（中略）

この体験がきっかけになり、生徒の思考と感情に対するアプローチに取り組むようになった。

初めは個別指導で取り組んできた感情の学習を、集団指導でも行うようになったという。

養護教諭が行う健康相談や個別指導の目標を、次の４つにまとめている。

①自分の感情に気づき、理解する。
②感情を適切に表現する。
③感情をコントロールする。
④他者の感情を理解する。

船木氏は、「課題となる性行動」について、以下の３点をあげている。

①自分を傷つけたり、危険にさらすような性行動。
不衛生だったり性器を傷つけたりするような方法

でマスターベーションをするとか、避妊をせずに無防備な性交渉をすることなど。

②相手を傷つけ、自分にも不利益となる性行動。トイレや更衣室を覗いたり他者の下着をとる、自分の性器を露出させて見せようとする、あるいは性器を触らせたり触ったりするなどの行動。

③問題となる性行動は、相手の周囲を困らせるだけでなく、その生徒自身にとっても危険性を高めたり、嫌われたり処罰を受けたりするなどの不利益につながるもの。

そして「課題となる性行動」の背景について、「生徒の満たされない気持ちや怒り、不十分なコミュニケーションスキル、相手の気持ちを理解することの難しさなどであり、決して特別で特殊な問題ではない」、また「自己理解や他者理解、コミュニケーションスキルや問題解決能力といった対人関係スキルの獲得、社会的ルールの理解、境界線の理解などが重要」であるという。

◆新しい自分をみつける「きもち学習」

大阪府立泉北高等支援学校では、毎月実施している体重測定の際に、集団保健指導を行っている。指導時間は、約 20 分間で、「自分のからだと気持ちを知ろう」を重視した指導を学年別に実施している。

集団指導では、①自分の感情に気づき、理解し、適切に表現する、②からだと感情のつながりを意識させる、③相手の気持ちを理解させる、ことを指導のポイントとしているという。

一方、個別指導は、生徒と担任、船木氏の３人で、月１回、放課後などに 60 分程度行っている。テーマは、その時々にタイムリーな話題を複数あげ、その中から生徒が選択した話題を話し合う方法をとっているという。話し合いは生徒が自由に話すことができる環境を整えることに留意し、ときには養護教諭や担任の自己開示をしながら、生徒が抱えている問題や想いへのアドバイスなどを行っているという。

話し合いが終えると、生徒から「次、いつやるの？」というような反応があるという。

「おとこじゅく」と名付けられた個別指導で取り上げる内容は、「男女交際」、「性交」、「性感染症」、「境界線」、「性情報」、「からだ」、「包茎」、「性被害」、「マスターベーション」などである。

「おとこじゅく～大人への 20 ステップ」として次のようなトピックを挙げている。

①チンチン・キンタマ　本当の名前は？
②性器は人前で見せていい？
③朝起きたらペニスが大きくなってた！
④勃起しちゃった！どうしよう？
⑤自分の包茎の色、形、大きさ気になる？
⑥包茎って何？
⑦陰のうにボールが当たった！いたい！
⑧朝起きたら白いものがパンツに！
⑨マスターベーションって何？
⑩好きな人への、ドキドキする気持ち
⑪好きな人をさわりたい。さわってもいい？
⑫キスって何？
⑬セックスって何？
⑭コンドームって何？
⑮陰茎がかゆい！どうして？
⑯アダルトビデオ（DVD）を見たことある？
⑰男の性被害
⑱どうしたらモテますか？
⑲トイレの神様っていますか？
⑳ 20 歳は大人ですか？

船木氏は、指導を通じて、生徒の心をひらくため、生徒の本音を聞くために心がけていることとして、「相談してもらえるような関わり」、「指導する側もコミュニケーション力を高める」、「教師は生徒にとっての性のモデルでもある」、「性の指導はできるところから」「生徒の全体像に目を向ける」、そして暴力の連鎖は、絶対に止めると強調された。

船木氏の実践報告は、学校での指導を再現しながら、ギター演奏、歌、スライドと多彩なもので、参加者を飽きさせない。

性のモラルを守るための性教育実践 ～軽度知的障がい者を対象に～

知的障がい者の小規模作業施設設立に関わり、その後３年間職員として勤務したなかで、性についての支援者の意識と利用者の気持ちの相違に衝撃を受け、現在の活動を始めたという武子愛氏は、通勤寮の就労軽度知的障がい者を対象にした性教育指導の実践を報告された。

通勤寮から提案された具体的なトピックは、「露出度の高い服の着用を避ける」、「寮の中および近隣など公共の場で交際中の寮生の過度な身体接触を避ける」という２点。

２つのトピックの背景には、ミニスカートをはいた寮生が盗撮をされたという事例と、通勤寮の利用者同士のカップルが、公共の場で過度な身体接触をしているのを目撃され、通報された事例があったからだという。

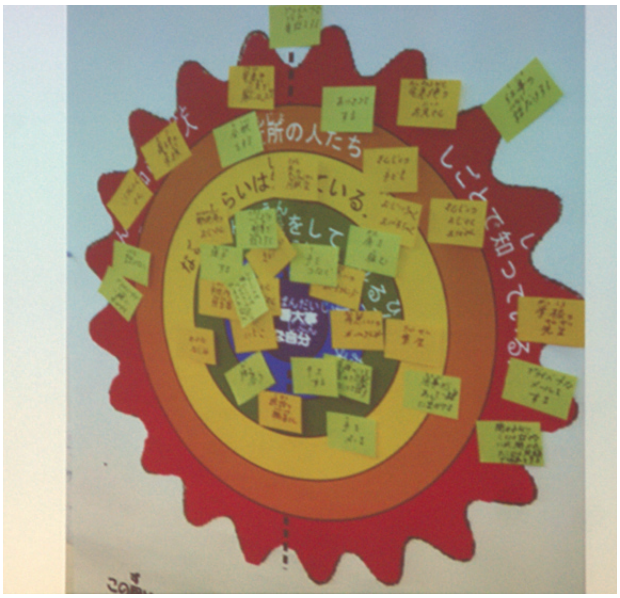
◆「サークルズ」をベースにした性教育

この実践には、男性 19 名、女性６名、計 25 名の寮生と職員２名（男性）が参加したものであるという。具体的には、バーバラ・ベインの「サークルズ」をベースに行われたディスカッションの内容報告であった。

「サークルズ」とは、カナダのバーバラ・ベインが開発した障がいのある人たちが他者との距離（境界線）を学ぶためのプログラムである。

登場人物と接触内容の２種類の付箋にし、「サークルズ」のイラストを付箋で埋めていくという方法で始まった。

カナダのバーバラ・ベインが開発した障がいのある人たちが他者との距離（境界線）を学ぶためのプログラムで、６色で作られた同心円を使い、それを取り巻く各色は自己からの距離にふさわしい態度･感情･行動を表す。自分にとって、どの位置にいる人なのか？　など、具体的な例を挙げて考えていく。



「サークルズ」に貼られた付箋

ちなみに、武子氏が設定した登場人物は、「宅急便の兄さん」、「きんじょの子ども」、「いとこ」、「きょうだい」、「両思いのガールフレンド・ボーイフレンド」、「学校の先生」、「電車やバスで隣になった人」、「寮生」、「おさななじみ」など 19 のカテゴリー。接触内容は、「握手する」、「手を振る」、「キスする」「プライベートなメールをする」「プライベートで一緒にでかける」、「抱き合う」など 18 カテゴリーである。

武子愛氏の実践報告

付箋で埋まったイラストをもとに３つのテーマでディスカッションを行っている。

ディスカッション①

露出度の高い服着用の有無

「胸のあいた服や、短いスカートをはいてみせていいのは、サークルの中のどの色の人たちまでだろう？」

ディスカッション②

公共空間における恋人同士の身体接触

「抱き合うとかキスは、どの色の人まで見せてもいいんだろう？」

ディスカッション③

見ず知らずの人への声かけの有無

「赤いサークルの人を好きになったらどうしたらいいんだろう？」

通勤寮で行ったこの性教育の実践について、武子氏は、次のように総括している。

- ●抑止（ダメ）を明確に伝えることはできたと思うが、代替えとなる容認（いいよ）される行動を伝えることができなかった。山本良典は「知的障害のある人たちの性に関する生活支援」(『保健師ジャーナル』）のなかで、知的障がい者の性について、性の問題発生後に禁止や否定をするのではなく、「認められる行動を学ぶこと」の重要性を指摘しているが、代替策がなければ一時的な変化にとどまるか、抑圧されるだけになってしまう。どうすれば容認される行動を伝えることができるかは課題である。
- ●今回は、男性の寮生も参加したので、妊娠、性産業など、女性が自らの問題として向き合わなければならないトピックには触れることができなかった。
- ●保護者の理解なく、避妊や性行為、妊娠や結婚など、踏み込んだ性教育を行うことは難しいと考える。知的に障がいがあっても一人の大人であり、知的に障がいのない成人と同じように他者と性的な関係をもつ権利がある。他者と性的な関係をもつことを前提とした性教育について、保護者の理解を得る方法を考えることも課題である。
- ●外部の者が性教育を施設で行う場合、その性教育が要因となって何かあったときは職員が支援を行っていくことになる。その際にどこまで関わっていけるかということも課題である。

参加者とのディスカッション

船木雄太郎氏（左）と武子愛氏（右）

お二人の実践報告後、休憩をはさんでセミナー参加者とのディスカッションが行われた。

「学校の中で、組織だって性教育を進めていったらよいのか」、「管理職の協力が不可欠だと思うのですが、どうしているのか」などの具体的な質問が、船木氏に出された。船木氏は、教材づくりも含めて学校全体で取り組むことが重要だという。具体的には、性教育委員会の委員長は養護教諭で、委員が各学年から男女各１名が参加し、月１度、各学年の実情の情報共有や教材づくりを行っているという。

武子氏には、外部講師の場合の対象となる施設との関わり方についての質問などがあった。武子氏は、施設との関係がまったくない状態で、知的障がいのある人たちと関わるのは非常に難しいと思うという。事前に人間関係づくりが必要だという。

ディスカッションでは、それぞれの現場で実際に活動している参加者が多く、真剣なやりとりが行われ、予定時間をオーバー、大変盛り上がった。

◉第24回関東甲信越静性教育研究大会長野大会◉

性教育によって育まれる未来とは

～子どもたちの健やかな成長と輝かしい未来のためにできること～

平成26年11月1日（土曜日）長野市のTOiGO長野市生涯学習センターにおいて第24回関東甲信越静性教育研究大会長野大会が開催された。長野大会は、長野県性教育研究会、全国性教育研究団体連絡協議会、関東甲信越静性教育研究団体連絡協議会の共催、長野県･長野県医師会･長野県学校保健会・長野県PTA連合会など21団体の後援を受けて開催された。

はじめに

大会主旨に、「性教育は大人の望む子どもを生産するためではなく、子どもたちが自分の力で幸せに生きようとするとき、支えとする学びのひとつです。私たちは子どもたちのために何ができるか、その結果何が育っていくかを講演会、分科会を通じて、様々な立場の大人や若者が共に学び、語り合いたいと思います」とある。

内容は、主旨に違わず多彩であった。体験発表、講演、親子トークライブ、４つの分科会などが300名余の参加者を集めて行われた。

大会会長である長野県性教育研究会会長の渡邊智子氏は、「今回の研究会は、今までの活動の成果ではなく、これから必要とされる研究会へと成長していくための、第１歩となる会にすべく企画しました」と語っている。

市民公開講座

午前10時の開会行事に続いて、「お父さん出番ですよ。子どもに性をどう語るか、子どもはそれをどう受け止めたか？」をテーマに、市民公開講座が開催された。４階の会場「大学習室２・３」は、多くの長野市民の参加もあり、満席になった。

最初に思春期ピアカウンセラーOBの朝岡徹氏の「私とピア」と題した体験発表が行われた。

石川哲也全国性教育研究団体連絡協議会理事長の挨拶

その後、一般社団法人日本家族計画協会理事長・家族計画研究センター所長の北村邦夫氏が、「産婦人科医師として、父親としての性教育」をテーマに講演をされた。

家族計画協会が行っている性意識に関する全国調査をもとに、性交開始時期を遅らせ、性行為に伴うリスク、望まない妊娠、HIV/エイズおよびその他の性感染症などから回避することができる包括的教育について、ユーモア溢れた講演をされた。

北村氏の講演後、北村氏と北村智氏の親子トークライブが70分にわたり行われた。

北村智氏は、吉本興業に所属する芸人で、長野市に定住し、お笑いコンビ「こてつ」の名で活躍している。「あなたの街に住みますプロジェクト」の長野県担当芸人でもある。

北村家の性教育トークライブ

お互いに細かな打ち合わせをせずに行われた北村家の性教育は、ちょっときわどい話もあり、会場を沸かせた。

公開講座には、290 名定員の会場に 300 余名の聴衆が集まり大盛況であった。

分科会

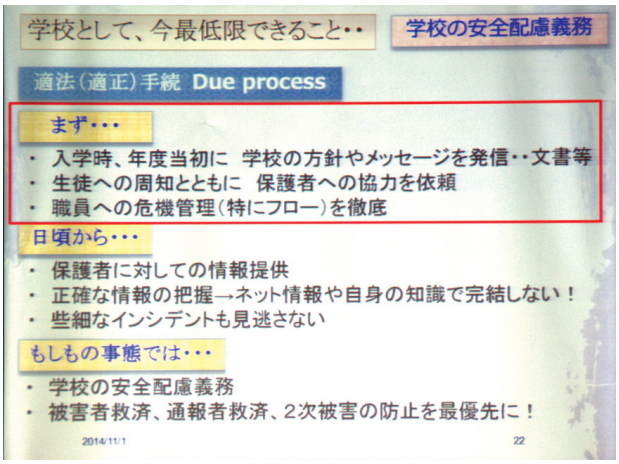
午後 1 時 30 分より、４つの会場で分科会が行われた。

第 1 分科会では、吉野一枝よしの女性診療所所長の司会、北村邦夫氏を助言者として、「せっかくだから聞いて話してみませんか？」のテーマのもと「性教育によって育まれる未来」について、会場からの質問に答える形式でディスカッションが行われた。

第 2 分科会では、岡田菊夫中央児童相談所所長の司会、針間克己氏（針間メンタルクリニック所長）を助言者として、「性犯罪の加害者への教育、メンタルの背景。加害者を変えていけるか」をテーマに行われた。針間氏は、東京家庭裁判所医務室勤務の経験などを踏まえて、性暴力の定義、性犯罪加害者のメンタル、心理療法などについて解説された。

性犯罪には、一対一の個人療法より、グループ療法が用いられることが多く、治療効果も高いという。2006 年から実施されている性犯罪者処遇プログラムでもグループ療法が中核に位置づけられているという。性犯罪者処遇プログラムとは、未成年性犯罪者を矯正するための計画で、2004 年 11 月に発生した奈良小 1 女児殺害事件を機に性犯罪を繰り返す者への処遇を検討する世論が高まり、これに応えるかたちで法務省が立ち上げたものである。

第 3 分科会では、平林洋一長野県教育委員会心の支援室指導主事の司会、南澤信之氏（一般社団法人セーフティーネット総合研究所）を助言者として「ネットの中のコミュニティとその裏側を知る」をテーマとして、子どもたちのネット利用の現状とその事件・事故防止対策などが語られた。



学校と保護者が綿密に連絡することが重要で、親の第 1 次養育義務として、「利用目的を明確に」、「子どもの利用実態を把握する」ことなどを最低限押さえることが必要であると強調された。

第 4 分科会では、高村寿子とちぎ思春期研究会会長を助言者に、栃木県、群馬県、長野県などのピアサークル、ピア研究会が参加し、「思春期ピアカウンセラー交流会」が行われた。

第４分科会「思春期ピアカウンセラー交流会」の様子

女子の性 隔月連載6

女は女として生まれない

早乙女智子
神奈川県立汐見台病院
産婦人科産科副科長

私は女性の人生の始まりから終わりまでの健康に関わっていますが、生まれるときも命が尽きるときも、そして生きて笑ったり苦しんだりする時間もすべて素敵な生き様だと思います。今回は、性哲学について語ってみたいと思います。

◇　◇

性哲学とは聞きなれない言葉だと思いますが、有名な性科学者のジョン・マネーが著書の中で書いています。ただ、その後、あまりこの言葉は使われていないのは、残念なことです。性科学はセクソロジーですが、性哲学はセクソソフィーといいます。あるいはセクシュアル・フィロソフィーといってもいいでしょう。人の生きる道を洞察するのに性を含めないで考えるのには無理がありますが、性を前面に出して議論するのもまた難しいものかも知れません。科学、サイエンスというだけではなくて性には哲学があり、それは今後、もう少し整理されていくだろうと確信しています。

生理学の教科書にも、生殖そのものであるリプロダクティブヘルスについては記載されていても、セックスの生理学である「性生理学」は書かれていません。医学の中でも研究が遅れていて広く周知されていない領域であることがわかります。

◇　◇

最近の私は、性の健康＝セクシュアルヘルスが、健康に関するあらゆる人の念頭に置かれることが何より重要だと考えています。それは、性教育の専門家だけが頑張るようなことではありません。

とても小さいことのようですが、子宮頸がん健診のクーポン券が気になっています。発行されるようになって、低かった日本の女性の健診率が20%程度から40%台まで上がってきたのは大変いいことだと思います。しかし、その券には、HPV感染のリスクがない性交経験のない女性は急いで受けに行く必要はない、ということが明記されていません。

そのため、受診者も何をされるか内診が不安だったり、医療者側も説明と同意に時間を要したりするという現場の混乱を招いています。これは、行政側が「性」の表現を避けているために起こることで、実は「性の健康」が厚生労働省でも、行政の担当者も大切できちんと表現してよいとされていない「社会」の問題なのです。

また、子宮がん健診については、閉経後の女性への配慮も不十分です。ウイルス感染のない、それまで健診で異常を指摘されていない真面目な受診者は、健診後3日くらい膣が痛かったり出血が続いても、歯をくいしばって毎年健診に来られますが、60代半ばまで受ければ十分です。その後は、出血や下腹痛など、症状があってからの受診で手遅れになることはほとんどないとされています。

「そろそろご卒業でいいですよ」とお伝えすると、たいていの方はほっとされます。なかには、「私はもう女じゃないってことですね……」とがっかりする方もいらっしゃいますが、「死ぬまで女ですよ、いつまでもいらしていただいてももちろんかまわないのです」とお答えしています。

◇　◇

女性のからだには、妊娠・出産という大仕事のために、自分らしく自由でいることを少し遠慮する仕組みがあります。性欲のままに性を謳歌するには避妊が欠かせませんし、性は謳歌していても思うように妊娠しない悩みもあります。基礎体温を付ける面倒、妊娠しなければならない気がする呪縛、妊娠したら仕事は辞めるべきだとの圧力を受け入れるスタンス、そして閉経後はいきなり女性ではなくなったと思い込む錯覚など、その仕掛けは多岐にわたり、自立しているように見える若い女性でさえ、驚くほどステレオタイプの女性観でがんじがらめになっているように思います。

その一つ一つを解き明かして溶かす作業は、賽の河原に石を積む作業に似ていて、この世の業の深さをしみじみ感じます。性的マイノリティーにかかる呪縛と

は比較できませんが、女性も、そして一見マジョリティーに見える男性でさえ一括りにはできず、特に性については、誰もが自分の立ち位置を慎重に推し測って暮らしているのかも知れません。

大人は性的な行為があって構わないでしょう。自分の責任において、そして大人なのですから性的な存在であっていいはずです。もちろん無くても構いません。性行為があっても恥ずかしい、なければないで恥ずかしい、といつまで隠していればいいのでしょうか。高齢化社会になって、性のニーズもますます高齢化しています。パートナーと死別したら性は終わりだとしたら、何十年も個人のニーズは満たせません。

実は、子どもも性的な存在です。他者からの性の対象としてのまなざしは、性被害の根幹をなしていますし、本人も何らかの性器を携えて生まれてくる以上、本格的ないわゆる性行為デビューは思春期や成人期だとしても、マスターベーションや抱かれる感覚の発達はそれこそ生まれた直後から始まっているわけですから、結局のところ、性的な存在でない人などいないのです。アセクシュアルですら、自分からは性的なことが起こらないにしろ、他者からの性的なアプローチに翻弄されるわけです。

◇　◇

最近の私の違和感は、「性機能障害」という言葉です。男性だと勃つか勃たないか、射精するかしないかのことを指すのかも知れませんが、女性はどうなのでしょう。濡れるか濡れないか、イクかイカないか、だけでは定義できないし、現状ではオルガスム障害を訴えて病院を受診する人はほとんどいません。また、女性の性反応が、自分で引き出すだけではなくパートナーとの関わりの中で引き出されてくるものだとすると、機能そのものというより、関係性や手技の未熟性、つまりスキルの問題が大きいことになりますが、現状で医療サイドでできることは実技なしの座学のみとなっています。

また、標準化も困難で、性交回数やパートナーの数などで評価するものでもありません。不妊治療中は逆説的ですが治療のために性交回数が少なくなりがちですし、産後のセックスレスも良く知られています。結婚当初一致していた性欲も、長年連れ添えば違ってくるのも当たり前です。

更年期は、昔は妻のお勤め終了という暗黙の了解がありましたが、今はそうでもないようです。食欲コントロールと似ているところは流行り廃りがあることですが、性欲のコントロールは個人差があり、パートナー間の了解、そしてライフイベントによる変化があり、一筋縄ではいかないものです。

◇　◇

哲学者シモーヌ・ド・ボーボワール（1908-1986）の『第二の性』を久しぶりに読みました。性的マイノリティーのことを「第三の性」ともいいますが、その元本です。「第二の性」とは、男性の性に対してそれに次ぐものという意味合いで、冒頭部分に「女は女として生まれない。女になるのだ。」とあります。本来の生理として避けがたい部分もあれば、多かれ少なかれ誰もが性を意識して適応しようとするのは人間が社会的な動物であるがためでしょう。

この連載も、実は「女子の性」というふうに限定して書いていることにずっと違和感を持ち続けていますが、それでも、日常的に女性を悩ませ、知識と工夫で健康を維持する必要のある身体に対して「性の健康」を維持することをもっと知って欲しいという想いで綴ってきました。

月経や妊娠・出産・授乳には、簡単には割り切れない様々な心身の課題があります。自分の身に起こってみなければわからないのは、第三の性の当事者のもっとも主張することかも知れません。しかしながら「第二の性」と言わざるを得ない女性の身体もまた、個々の事象を見るとそれぞれがマイノリティーであると言ってもいいほど、多様性と苦悩に満ちています。産婦人科医師として、妊娠経験のある人、ない人、と区別したことはありませんが、一人の人間が、妊娠前と後で変わるのをどう支えていくかに腐心しています。

知りたい情報にアクセスすることがいつでも自由であり、困った時に相談できる場所が確保されており、ネイルの色を選ぶように、行きたい場所に旅行できるように、性の健康を支援したい。そんな想いでこれからも診療・研究・啓発をしていきたいと思っています。

性教育の歴史を尋ねる

戦後・純潔教育編

茂木輝順

第23回 文部省純潔教育分科審議会の活動（その１）

もてぎ　てるのり
女子栄養大学大学院栄養学研究科保健学専攻博士後期課程修了、博士（保健学）

第20～22回にかけて、地方における純潔教育委員会や性教育・性科学の展覧会などについて述べましたが、今回から第19回までに述べた文部省純潔教育分科審議会（1949年～）のその後の活動について述べたいと思います。伊藤秀吉（純潔教育分科審議会長）が『文部時報』1950年10月号（pp.36-37）であげた純潔教育分科審議会の活動内容は次の５点です。「一、出版界の自粛要請と指導勧告　二、映画界の自粛に関する勧告　三、男女交際の礼儀、基準設置　四、夏休みの純潔教育についての勧告　五、指導資料作製」。このうち、今回は、一の「出版界の自粛要請と指導勧告」について述べます。

日本基督教婦人矯風会の機関誌である『婦人新報』の1949年12月号（p.9）は、「ちかごろの婦人雑誌表題は性生活の科学的指導と銘うつても、内容はまことにきわどい、売らんかなのエゲツないものが相当にあり、文部省の純潔教育委員会でも、これを取りあげて協議の結果、警視庁あたりとも協力して、（中略）雑誌社に呼びかけて参集をもとめ、自主的に倫理規定を設けるよう要望するとのこと」と伝えています。さらに、『読売新聞』1950年２月18日夕刊（p.2）は「お役人が性記事　文部省純潔教育審議会厳重な抗議」という見出しで、「エロ雑誌に官職名入りで公的調査の真面目な資料を発表するのはけしからぬ！とちかく文部省純潔教育分科審議会が厚生省に厳重抗議を申し入れることになつた　雑誌はいわゆる“夫婦もの”で著名な某誌（後略）」と報じています。本連載では詳しく述べていませんが、終戦直後の性情報の氾濫の例としてよくあげられるのはいわゆるカストリ雑誌です。が、これらの記事で純潔教育分科審議会の槍玉にあがっているのは婦人雑誌や夫婦雑誌と厚生省です。

『読売新聞』の1950年２月12日夕刊（p.3）は、「猟奇雑誌いわゆるカストリ雑誌、エログロ雑誌は今ではほとんど本屋の店頭にはみられなくなった」とカストリ雑誌ブームの終焉を伝え、「性に関する本」と言えば「“キンゼイ報告書”“性の百科事典”“完全なる結婚”のたぐい」とともに「『このほかには婦人雑誌か夫婦雑誌ですね』」という本屋の主人の談を紹介しています。純潔教育分科審議会が厚生省に抗議したという“夫婦もの”とは、「夫婦雑誌」の代表的存在と言える1949年創刊の『夫婦生活』（夫婦生活社発行）(1)で、具体的には1950年３月号に掲載された、当時・厚生省人口問題研究所調査部第四科長であった篠崎信男の論文（「国家的大調査機関による六三五組夫婦の性生活実態報告書」）を指します。先の『読売新聞』２月18日の記事は、「政府の手でまとめたきわどい報告は読む対象を考えて慎重に選定すべきだ、まじめな調査を単に興味本位で扱うのは面白くない」という「Ｙ委員談」(2)も伝えています。この一方で、人民社発行の雑誌『真相』1950年２月号（p.64）では、「文部省の純潔教育委員会が警視庁と協力して（引用者注：夫婦雑誌を）取締ろうとする気配もあるが、この委員会は今のところ有名無実の存在で、キリスト者山室民子やガントレット恒子が、テイーパテイーばかりやつている有様だから甚だたよりない」と揶揄されています。

また、翌年の『読売新聞』1951年６月５日朝刊（p.2）は、わいせつ物頒布罪と表現の自由とをめぐる裁判で著名となる『チャタレイ夫人の恋人』（伊藤整訳・小山書店発行）に対し、「文部省純潔教育審議会（会長伊藤秀吉氏）および児童文化審議会（会長神崎清氏）では緊急総会を開いて審議検討を行った結果『現在の社会環境においてこの書を未熟な青少年に与えることは教育上好ましくない』との結論に達し、今後良書推薦、悪書追放に関する判定には出版倫理規定等による委員会のような民主的組織により適切な措置をとるよう出版界に要望する事になった」と報じています。雑誌や書籍の性記事を何らかの形で統制しようとする取締当局と出版界とのイタチごっこに、純潔教育分科審議会も巻き込まれていったことがうかがえます。

（注）

(1) 雑誌『夫婦生活』には、日本性教育協会の永井潜や福岡武男、文部省純潔教育委員会委員の久慈直太郎や村岡花子、双方および純潔教育分科審議会にも関わった安藤画一、といった本連載でも登場してきた人物の寄稿もあり、単にカストリ雑誌の後継誌とは位置付けられない学術性も感じられます。

(2) この「Ｙ委員」とは、以下の文献から山本杉であると推測できます（山本杉「純潔教育振興策」『社会教育』５巻４号全日本社会教育連合会1950年p.32）

BOOK GUIDE
今月のブックガイド

戦国武将と男色

知られざる「武家衆道」の盛衰史

乃至政彦著
洋泉社
定価 940 円＋税

貧しい日本の「男色」研究

「同性愛」は時代や地域に限定される概念で、日本でも明治以降、西洋の文化が輸入されることで広まった。近代以前は、この国では男性間での性愛を「男色」と呼んでいたが、それは年長の男性と少年との関係を指し示すのであって、現在でいうところの「同性愛」と同様に論じることはできない。という議論も、もはや定番になりつつあるが、では私たちは「男色」そのものについて理解しているのか、というと、これが心もとない。自分たちの国の性の歴史について、わかりたいとも思ってこなかったのである。

本書『戦国武将と男色』は「男色」をテーマにしていて、主に戦国時代の武士におけるそれを扱っている。鎌倉時代までは公家や僧侶のあいだで嗜まれていた「男色」が、室町時代になって文化として武士階級の上層に取り込まれ、それが次第に一般化していく過程を、一次史料を渉猟することで筋立てていく。肝は、戦国期の男色に関する学説の多くが、江戸期に書かれた二次史料を元にしており、そうした記録をそのまま根拠にすることはできない、という批判だ。

著者は一次史料をたんねんに読み解き、「男色」は戦場から生まれた…であるとか、武士の嗜みであった…とか、多くの武将が男色関係で出世した…といった通説・俗説を、ことごとく退けていく。例えば、一般的にも流布されている、織田信長と森蘭丸の念者・稚児関係などは、森蘭丸そのものの実在がたしかではない！とのことで、「歴史学ではそろそろ退けられるべき俗説」だと、ばっさりと斬り捨てられる。

興味深いのは、近代以前、日本は同性愛に寛容であった、という見方は一面的で（外国の宣教師らが驚いたように男性どうしの性行為は珍しくなかったが）、実際は、江戸時代に書かれた書物でも、「主従の武家男色を肯定的に扱っているものは意外なほど少なく、多くは『傾国の物語』を匂わせる筋書きで、佞臣や無能者が功もなしに出世して、御家の前途を狂わせる設定にされている」。

また幕藩体制下では、毛利家や上杉家、吉川家などでは現実に男色の禁止令が出されていた。その理由は、当時、若衆や小姓などをめぐる喧嘩、騒動が絶えなかったからだという。ちなみに、幕府も承応元年（1652）に「衆道之儀」による無体を禁じている。

「一、『衆道之儀』につき、町人の少年児童や小姓に文を送って『無体なる儀』を申しかけることは、堅き御法度である。今後それでも違背する者があれば、きっと曲事とする」

著者は言及していないが、キリスト教圏のように同性間の性愛が罪だから禁じられたわけではなく、男どうしの絆によって社会秩序が乱される影響が問題視されている。性愛を内面的な倫理に抵触するものと観ているか、欲望ではなく、行為による効果を気にしているのかの違いだろう。そこを比較分析することで、西洋と日本のセクシュアリティの本質的な差異を論じることもできるはずだ。

そして、同性どうしの性愛関係が通史的に自然な生理としてはありえなかったのか、という素朴な疑問も残る。「女色」の場合は、それを風俗や文化としてとらえる以前に、自然なものとされるのだから。本書の議論は、記録に現れた男どうしの関係を繋いでみせるわけだが、社会において可視化されなかった同性どうしの欲求や行為がなかったとは言えない。「同性愛」に生物学的な根拠があるとしたら、そうした視点もまた必要になるはずである。

本書の意義は何より、男色研究がいまだ研究の体を成してない水準であることをつまびらかにしてしまったことにある。その指摘は、今後の研究発展における大きな前提となるだろう。　　（作家　伏見憲明）

JASE Information

研究会、研修会等の情報を下記まで、郵送または、Fax03-5800-0478でお寄せください。

〒112-0002　文京区小石川2-3-23春日尚学ビル B1
日本性教育協会「JASE ジャーナル」係

▶▶ 3月8日（日）10：00～17：00 ◀◀

国際基督教大学ジェンダー研究センター
開設 10 周年記念シンポジウム

希望をつなぐ〈場〉をつくる

それぞれの地域におけるジェンダー・セクシュアリティの課題

スピーカー

宇佐美翔子（NPO レイプクライシス・ネットワークアドボケートカウンセラー）、岡田実穂（NPO レイプクライシス・ネットワーク代表）、村木真紀（特定非営利活動法人虹色ダイバーシティ代表）、新山賢（HaaT えひめ代表）、砂川秀樹（レインボーアライアンス沖縄）ほか。

会　場　国際基督教大学ダイアログハウス２F 国際会議室
（東京都三鷹市大沢 3-10-2）

主催・問い合わせ等

参加費等／無料・予約不要
主催・問合せ先／国際基督教大学ジェンダー研究センター
〒 181-8585 東京都三鷹市大沢 3-10-2
国際基督教大学育研究棟 (ERB-1) 301
TEL&FAX　0422-33-3448　　Email：cgs@icu.ac.jp

▶▶ 3月21日（土）～22日（日） ◀◀

GID（性同一性障害）学会第 17 回研究大会
～トランスジェンダーの健康と権利～

国際的診断基準である DSM-5 から GID の名称消え、GD（性別違和）に変更されました。世界は「トランスジェンダーの健康と権利」をキーワードに大きく変わろうとしています。

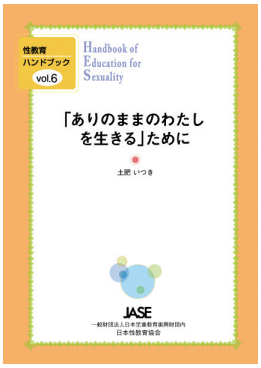
内　容　①特別講演、②シンポジウム、③一般演題 ④パネルディスカッション、⑤ワークショップ、⑥学術展示、　ほか。

シンポジウムのテーマ　GID 医療とケアの最前線、GID 医療と健康保険適用、生きづらさとレジリエンス、性別承認のポリティクスと特例法、児童・思春期の性別違和、ほか。

会　場　大阪府立大学中百舌鳥キャンパス
（大阪府堺市中区学園町 1-1）

参加費・問い合わせ

参加費 /3,000 円（学生 1,000 円）
大会事務局　大阪府立大学教育福祉学類　東研究室（担当：花田）
TEL　072-252-1161 内線 2595　　FAX　072-254-9793
Email：gid17osaka@gmail.com



性教育ハンドブック Vol.6　　好評発売中！

『「ありのままのわたしを生きる」ために』

土肥いつき著　　◆A５判：86 頁、頒価 500 円

『現代性教育研究ジャーナル』に３年間連載された、「性別違和」である作者が悩みや葛藤の中で紡いできたありのままを語る自叙伝です。両親や友達との出会いの中で小さなトゲのような違和感を心の中の小さな箱の中にしまい込み、教員生活を送り、Ｊさんと出会い、そして SRS に向かい、女性として生きるわたしの航海を描いた新刊です。

主な内容

港にて（自分史の試み…）/ 船出のとき（小さなトゲのような思い…）/ 帆をあげる（教員生活のはじまり…）/ 舵を切る（「身体改造の」開始…）/ 嵐の中で / かすかに見えた航路 / 新たな旅へ

著者プロフィール

1985 年より京都府立高校教員。セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク副代表、トランスジェンダー生徒交流会世話人、まんまるの会（関西医科大学附属病院ジェンダークリニック受診者の会）世話人代表など。映画『coming out story』に出演。

既刊〈性教育ハンドブック〉

☆性教育ハンドブック Vol.5　『21 世紀の課題＝今こそ、エイズを考える』 池上千寿子著　A5 判・68 頁 500 円
☆性教育ハンドブック Vol.4　『性教育の歴史を尋ねる～戦前編～』茂木輝順著　A5 判・92 頁 500 円

※送料：１冊 215 円、２～３冊 300 円、４冊～６冊 350 円。
◆ JASE ホームページ http://www.jase.faje.or.jp/pub/pub.html からお申し込みいただけます。
または、Email　info_jase@faje.or.jp
TEL 03-6801-9307　FAX 03-5800-0478